

読解問題

I 次の文章で、筆者の考える「未知との遭遇」とはどのようなものですか。

1

若者によくある誤解がある。知らない世界を見ることが、未知との遭遇だと思っているのである。だから「自分探し」に、イラクまで行ってしまふ。未知がイラクにあるのではない。「自分が同じ」だから、世界が同じに見えるのである。それで「退屈だ」なんて贅沢ぜいたくをいう。知らない環境に入れば、自分が変わらざるをえない。だから未知の世界は「面白い」のである。

「変わった」自分はいままでとは「違った」世界を見る。自分が変われば、世界全体が微妙にずれて見える。大げさにいうなら、世界全体が違ってしまふ。それが「面白い」。つまり「未知との遭遇」とは、本質的には新しい自分との遭遇であつて、未知の環境との遭遇ではない。そこを誤解するから、若者はえてして自分を変えず、周囲を変えようとする。

(養老孟司『無思想の発見』筑摩書房)

1. 知らない世界を見ること
2. 自分の周囲の変化に気づくこと
3. 世界全体の変化を感じること
4. 変化した自分に出会うこと

II 次の文章で筆者は、ことばの「定義」について何と述べていますか。

2

その項目の執筆者が、自分の説に従ってそのことばを定義し、その定義だけしか書いてくれないのは、辞書としてはたいへん困る。ひいた人はそういう定義だと思ってしまうが、その定義は世の中に通用しているものとはちがうのである。執筆者は自分の主張が正しいと信じ、その体系で「世直し」をしようと思っている。しかし、世の中はそうかんたんに「直る」ものではない。

*文部省による「学術用語」制定も、「世直し」の一つである。常用漢字も同じことだ。そのどちらも、世間に完全に受け入れられたことはない。

昔からいわれるとおり、ことばは生きものである。どこかの権威によって統一されたり、整理されたりするものではないし、正しいとか正しくないとか裁定されるものではない。いろいろなものがいり混って、ごちゃごちゃと動いてゆくうちに、おのずから落ち着いてくるものなのだ。

(日高敏隆「ある辞書づくりの体験から」岩波新書編集部編『辞書を語る』岩波書店)

*文部省:現在は「文部科学省」

1. ことばの「定義」は、自然に決まっていくものだ。
2. ことばの「定義」は、辞書が正しく決めなければならない。
3. ことばの「定義」は、権威ある学者が書くものだ。
4. ことばの「定義」は、文部省が統一すべきだ。

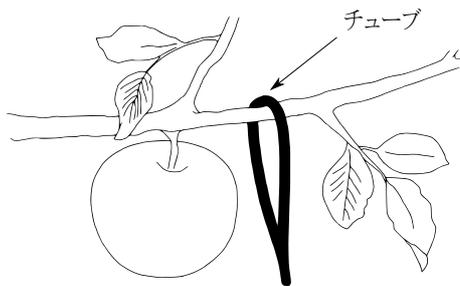
III 次の文章は、ガという害虫の被害を防ぐための防虫剤について述べています。この防虫剤は果物の木に取り付けるチューブ状の物ですがその特徴はどれですか。

3

チューブの中には、合成されたガのメスの性フェロモン物質がぎっしりと詰まっている。その濃度は、メス1匹分の数万倍にも達する。

このチューブは新手の「防虫剤」だ。ガのメスは交尾の際その種ごとに特有の性フェロモンを出す。オスはそのにおいに惹かれメスを探し当てる。性フェロモンを畑一帯に充満させることで、オスとメスの間の交信をかき乱し、交尾させないようにできる。害虫の繁殖を抑えられるうえ、果実への残留もない。食の安全に関心が高まるなか、殺虫剤を減らす防除技術として注目が高まっている。

(中川透『『ほれ薬』で害虫防除』朝日新聞 2009年7月4日)



1. 害虫が動けないようにする。
2. 害虫の卵を駆除する。
3. 害虫の生殖行動を妨げる。
4. 害虫のメスの数を減らす。

IV 次の文章は、日本語のコースについてのお知らせです。内容と合っているものはどれですか。

4

〈日本語夏期集中コース〉

申込方法: 受講申込書に必要事項を記入のうえ、留学生センター事務室に提出してください。

申込期限: 7月9日(金)正午まで

クラス分けテスト: 7月9日(金)17時から、共通教育棟1A教室で、クラス分けのためのテストを行いますので必ず受けてください。春のコース受講者も必ず受けてください。テストを受けないと、コースの受講は認められません。

結果発表: クラス分けの結果は、7月13日(火)の午後に、留学生センターの掲示板に貼り出します。自分のクラスと教室を確認して、第1回目の授業に出席してください。

1. 受講したい人は、事務室に申込書を提出してからテストを受けなければならない。
2. 受講したい人は、事務室で申込書をもらい、テストを受ける教室でそれを提出する。
3. 受講したい人で、春のコースを受けた人は、テストは免除される。
4. 受講したい人は、9日の午後5時までに申込書を提出して、テストを受けなければならない。

V 次の文章で筆者が最も言いたいことはどれですか。

5

考えるという行為は、その考えが何らかのかたちで表現されてはじめて意味を持つものです。よく会議などで、腕組みをして目をつぶり、何もいわずに黙ったままの人がいます。思慮深そうに見えるものですから、何もいわない分だけ、きっとすごいことを考えているに違いない、と誤ってしまうこともあるでしょう。たしかに、「沈黙は金」の日本社会では、黙っていることのほうが、気軽に意見をいうよりも「賢く」見えることがないわけではありません。しかし、頭の中で、どんなにすごいことを考えていたとしても、それを他の人に表現しないかぎり、その考えは、ないに等しいのです。

(荻谷剛彦『知的複眼思考法』講談社)

1. 軽々しく口を開かず、よく考えたほうがいい。
2. 気軽に意見をいう人は、思慮が浅い。
3. 考えたことは、人に伝えなければ意味がない。
4. 考えたということは、それだけで価値がある。

VI 次の文章で筆者が最も言いたいことはどれですか。

6

我々の生活には、思い通りに行かないことが多い。思い通りに行かないとストレスを感じる。誰かに命令されて意に添わないことをしなければならぬときのように、嫌だと感じるものに対して、我々はストレスを感じる。自分の内部からではなく外部から与えられる圧力を悪い意味にばかり解釈している。しかし、我々の意欲を高めようという気持ちにさせる力も同じく、外部から与えられることが多い。エネルギーの作用から考えれば、それも同じ圧力ではないのか。自分にかかる圧力が、プラスのものかマイナスのものか、それは自分の心が決めるのだと思う。嫌な仕事にストレスを感じることは多い。けれども、その仕事に自分なりの意味付けをすれば、楽しく感じられるようになるだろう。外部からの力を自らの力に転換する工夫が、人生を豊かにする。

1. 意欲を高めるためには、外部からの圧力をなくすことが必要だ。
2. 人生を本当に豊かにするのは、実はマイナスの圧力だ。
3. 自分の解釈だけで物事の良し悪しを決めてはいけない。
4. 嫌なことでも価値を見いだせば、楽しめるようになるのだ。

VII 次の文章は美術品の修復に関する記事です。修復作業で、現在重視されていることは何だと言っていますか。

7

日本の古い絵画や書など、美術品を修復する仕事とはどんなものなのだろうか。修復作業関係者に話をきいた。

例えば、絵画の修復で。よオリジナルの絵の具がはがれ落ちるのを防いだり、切れそうな紙をつなぎ合わせたりするが、それに先立ち、前回修理した部分を取り去る作業が必要なのだという。実はここで、百年以上も前に修理した職人の仕事の良し悪しがわかるのだそうだ。

従来、修復作業は、どこを直したかが判らないような仕上がりがよいとされていた。しかし、現在は傷みの進行を食い止めることが大切なのだという。また、この先再び修理するときのことも考えて作業するのだそうである。

昔の美術品に使用されたものと同じ紙や絹の素材も、時代とともに手に入らなくなってきているという。また、同じ素材を用いて直しても、傷みやすかったり、時代を経た美術品には合わなかったりすることもあるらしい。そこで、近年は素材に人工的な加工を用いるなど、修復作業も科学の力に負うところが多くなってきているという。

(松岡資明「匠の技歴史の名品命継ぐ」日本経済新聞 2003年2月8日夕刊を参考に作成)

1. 昔の職人の修理方法をチェックすること
2. これ以上傷んでいかないようにすること
3. 直した場所がわからないように仕上げること
4. 昔どおりの素材を使って直すこと

VIII 次の文章で筆者は今後何が最も必要だと言っていますか。

8

野鳥の分類や生態などについては、わが国でも研究が進み多数の報告書や論文が発表されるようになった。しかし、野鳥保護を考えたとき、その鳥の生態とともに、もう一つ重要なのは個々の種類についての数量的なデータではないだろうか。例えば、「この種類は、正確には何羽程度生息しているのだろうか」といった基本的なものから、それらを総合して「野鳥は減っているのか、あるいは増えているのか」などについて正確な情報が重要であるが、残念ながら、これらについては、まだまだ十分な情報が集められているとは言えない。

(岡本久人他『野鳥調査マニュアルー定量調査の考え方と進め方』東洋館出版社)

1. 野鳥保護の明確な定義
2. 野鳥の種類と生息地についての情報
3. 野鳥の分類や生態についての研究
4. 野鳥の正確な数の把握

IX 次の文章で筆者は、言語能力について何と書いていますか。

9

私どもにとっての母語、つまり生まれてこのかた最初に身につけた言語、心情を吐露しモノを考へるときに意識的無意識的に駆使する、支配的で基本的な言語というのは日本語である。第二言語すなわち最初に身につけた言語の次に身につける言語、多くの場合外国語は、この第一言語よりも、決して決して上手くはならない。単刀直入に申すならば、日本語が下手な人は、外国語を身につけられるけれども、その日本語の下手さ加減よりもさらに下手にしか身につかない。コトバを駆使する能力というのは、何語であれ、根本のところでは同じなのだろう。

(米原万里『不実な美女か貞淑な醜女か』新潮社)

1. 第一言語を超えるほどには第二言語はうまくならない。
2. 方法を選べば第一言語より第二言語のほうがうまくなる。
3. より多くの外国語を学んだほうが母語はうまくなる。
4. 外国語の能力と母語の能力の間には関連がない。

- X 次の文章では、人類が言語を獲得した時期について述べています。筆者は、脳の容積と言語獲得との関係について、どのように考えていますか。

10

言語を生み出す土台となる脳の容量、あるいはその形態的特徴から、人類が言語を獲得した時期を推定する試みがある。頭蓋骨から推定される人類の脳の容積は年代とともに徐々に増大してゆき、今日のような脳のサイズに至っている。中でもこの脳の容積が急激に増大して現代人のそれに近づく時期が、人類が言語を獲得した時期を推定するうえで有力な資料になるとされている。…(略)…

ヒトの脳はチンパンジーなどの類人猿にくらべて格段に大きなサイズをもち、これと言語活動とは不可分の関係にあることはわかる。しかし、脳の一定以上の容量や現代人の脳に近似した左右大脳半球の大きさの違いなどの脳の形態上の特徴は、その言語のための神経回路網形成の必要条件の一つではあるが、脳の形態的特徴がそのまま言語発生のための脳機能を示すものとはいえ、言語獲得のための十分条件とはなりえないと考えられる。脳の発達と言語とは不可分の関係にあるが、形態のみからその機能を推定するのはやや大胆にすぎると思われる。

(本庄巖『脳からみた言語——脳機能画像による医学的アプローチ』中山書店)

1. 人類は、脳の容積が急激に大きくなった時期に言語を獲得した。
2. 言語獲得の時期は、脳の容積だけを根拠にして特定することはできない。
3. 脳の容積についてもっと調べなければ、言語獲得の時期はわからない。
4. 脳の容積と言語の獲得との間には、あらゆる意味において関係はない。

XI 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

所有権があいまいな資源は、劣化しやすい。逆に、だれのものかがはっきりしている資源は劣化しにくい。

森がだれのものか明らかでなく、だれでも自由に焼畑*を作ることができるなら、農民に森を大切にしようとする動機は生じない。手間をかけて元の森に回復させたところで、自分が次も耕作できるとは限らない。おそらく他のだれかが、そこを焼いてしまうだろう。それなら、畑の地力が下がったら、そこは放棄して他に移動するほうが合理的である。

しかし、森の所有権が個人に与えられて、持ち主以外の利用を排除することができれば、人口が増えても資源劣化は生じにくい。「自分の森」ならば大切に使われるからだ。そして、森の所有者が焼畑だけでは長期的には食べていけないということになれば、所有者は生産方式を変えるなどの工夫をして、森を守ろうとするだろう。

(藤倉良他『文系のための環境科学入門』有斐閣)

*焼畑：畑の地力が衰えると別の森に移り、その森を焼いて畑を作る農法

問1 下線部「そこは放棄して他に移動するほうが合理的」なのはなぜですか。

11

1. みんなの賛成が得られるから
2. 労力を費やしても無駄になるから
3. 倫理的に正しいから
4. 昔ながらの方法を守れるから

問2 この文章で筆者は、どのようにすれば人々が資源を守ろうとすると述べていますか。

12

1. 資源を自由に利用できるようにする。
2. 人口が増え過ぎないようにする。
3. その資源がだれのものかを明確にする。
4. 焼畑を規制して森を守る。

XII 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

コミュニケーションの目的は、情報知識感情、意思などを「分かち合う」ことです。分かち合うとは「相手と同じものを持つ」ことです。それができて初めてコミュニケーションが成り立ったといえます。

ところが、人それぞれに考え方の枠組みがあり、自分と同じ枠組みを持った人はいません。自分の枠組みのなかで正しく伝えたと思っても、相手は相手の枠組みで解釈するので、別の意味になる可能性があります。そこにコミュニケーションの難しさがあるのです。

(A)、上司が部下に「考えておいてくれ」と言ったとします。上司のコンテキストでは、「検討しろ」という命令を意味しているのかもしれませんが。ところが部下のコンテキストでは、「検討に値するかどうかを判断せよ」というように解釈するかもしれません。そうすると、「やれと言ったのに!」「そんなの聞いていません!」という議論になってしまいます。物理的に情報が伝わっていても、その意味が伝わらなかったからです。

(堀公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社)

問1 (A)に入るものとして最も適当なものはどれですか。

13

1. とはいえ
2. 一方
3. そこで
4. たとえば

問2 下線部「物理的に情報が伝わっていても、その意味が伝わらなかったからです」というのはどういうことですか。

14

1. 部下は上司の命令を聞いたが、二人の解釈は異なっていた。
2. 部下は上司が命令したことを知らなかった。
3. 部下は上司の命令の意味がわからなかったのに確認しなかった。
4. 部下は上司の命令を聞いたが、無視した。

XIII 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

内発的動機というのは、外から強制されたわけではなく、その人自身が「おもしろそう」と思って何かをしよう、したいと思う気持ちです。このような気持ちから発する行為に対して報酬を与えると、報酬を与えられた人のその後の内発的な動機付けに影響するでしょうか。また、報酬の与え方によって影響の仕方に違いが出るでしょうか。これらのことを調べるために行われた実験を紹介します。

実験の対象となったのは幼稚園の園児で、みんな絵を描くのが好きな子どもたちです。絵の時間に子どもたちに色鉛筆を与えると、みんな喜んで絵を描きます。この子どもたちを三つのグループに分けました。一つめのグループには、「じょうずに絵を描いたらご褒美*をあげる」と予告しておき、絵を描いた後にこのグループの子どもたち全員にご褒美をあげました。二つめのグループには、ご褒美について何も予告しなかったけれども、最後にグループ内の子どもたち全員にご褒美をあげました。三つめのグループには、何も予告せず、何のご褒美もあげませんでした。

数日後の絵の時間に、ご褒美の予告をせずに子どもたちに色鉛筆を与えたところ、進んで絵を描いた子は、一つめのグループでは、二つめ三つめのグループの場合の半分くらいしかいませんでした。つまり、(1) 一つめのグループの子どもたちの内発的動機は、(2) 他の二つのグループに比べて低くなっていたと言えます。

(山岸俊男『社会的ジレンマ』PHP 研究所を参考に作成)

*ご褒美:ほめて与える品物

問1 下線部 (1) 「一つめのグループの子どもたち」と (2) 「他の二つのグループ」では、最初に絵を描かせたとき、どのような点で違いがありましたか。

15

1. 上手な絵を描いたかどうか。
2. ご褒美をもらったかどうか。
3. ご褒美をもらった子が、グループの中の全員だったかどうか。
4. 絵を描く前に、後でご褒美をあげると言われたかどうか。

問2 この実験で、内発的動機が低くなったのは、どの場合ですか。

16

1. 報酬を予告して、実際に与える。
2. 報酬を予告するが、実際には与えない。
3. 報酬を予告しないが、実際には与える。
4. 報酬を予告しないし、実際にも与えない。

XIV 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

毒があつて味がまずい種類の動物は、そのことを強調して示すために、警告色と呼ばれる派手な色をしていることが多い。また、毒がなくて無害な種が、実際に毒があつてまずい種に似せる、ベイツ型擬態というものがある。これらはなぜ信用されるのだろうか? …(略)…

毒があつてまずいことを知らせる警告色は、赤、黄色黒といった縞しまや斑点はんてんであることが多い。これらの色素を作りだすにもコストがかかる。こういった化学物質の多くはカロチノイド系であるが、これらを合成するのは、それほど簡単なことではない。ベイツ型擬態で、毒のあるものに擬態している種類も、実際に毒はないものの、色を出す化学物質は自ら作っているのであり、ただで楽々とまねしているわけではないのだ。

ベイツ型擬態の場合など、本当には毒ではないのだから、敵は、それを見分けることができた方がよいだろう。しかし、非常によく似たものを見分けるには、また、見分ける側にコストがかかる。そして、中途半端に見分けて失敗したときのコストは、さらに大きくなるだろう。そこで、「一応、どれも信用する」という無難な手をとっているのかもしれない。

(長谷川真理子『科学の目科学のこころ』岩波書店)

問1 実際に毒がない動物は毒がある動物をどのようにまねしていますか。

17

1. 毒のある動物が体外に出す化学物質を利用する。
2. 毒のある動物と似た色の化学物質を合成する。
3. 味がまずく感じられる化学物質を出す。
4. 実際に毒のある化学物質を作り出す。

問2 下線部「一応、どれも信用する」の意味として、最も適当なものはどれですか。

18

1. どんな色の動物も毒がないと思う。
2. どんな色の動物も毒があると思う。
3. 警告色ではない動物も毒があると思う。
4. 警告色の動物はすべて毒があると思う。

XV 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

一般に買い物の決断というのは、消費の現場でなされることが多い。何をかうか、あらかじめ決めている人は少数派で、実際に店に行って、あれこれ見て、手にとってみて、よし、これにしようと思決める人が多い。そして売上げは、「客が店にいる時間が長ければ長いほど大きくなる」といわれている。つまり、消費の意思決定はお店でなされることが多く、そのお店になるべく長くいてもらうようにすれば、売上げが伸びる、ということだ。

もちろん長居をしても何も買わずに帰る人もいる。それでもいいのだ。なぜなら、それらの中には、何も買わなかったけれど、「へえ、こんな商品があるんだ。面白いなあ」とか「いつかこんな素敵な椅子をうちのリビングにも置いてみたい」などと思う人が必ずいるからだ。

滞留時間の長さは、お客が感動する機会を増やし、次の来店、次の購買につながるのである。顧客満足度ではなく顧客感動度が、将来の売上げになっていくのだ。それだけにお客がじっくりと見て歩き、買い物のできるようなお店づくりはとても重要になる。

(川北義則『「ない」といわれたところに市場はあった!』PHP 研究所)

問1 筆者の考えている店づくりが、あまり効果的でないのはどのような人たちですか。

19

1. あらかじめ決めているものだけを買ってすぐ帰る人
2. 店で、あれこれ見てからかう人
3. 長居をしても何も買わずに帰る人
4. 「こんな商品があるんだ。面白いな」などと思う人

問2 この文章で述べられているのは、どのような考え方ですか。

20

1. 何をかうかをすでに決めている客が多ければ、売上げがあがる。
2. 店に来る客の数が多いほうが、商品を買う客の数も多くなる。
3. 買った商品に満足すれば、客はまたその店で買い物をする。
4. 店に長くいて商品に心を動かされた客が、商品を買うことが多い。

XVI 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちは、プロの苦勞を知らないまま、安易に批判してしまうことがある。先生の立場では、子どもの教育上、どうしても指導しておかなければならないことがあるものだが、子どものうちはそれが分からず理不尽に感じたりする。大人になっても、道路が渋滞するのは行政が悪いと決めつけることもある。

もちろん、プロが必ずしも正しいわけではないし、プロだからこそ常に外部からの厳しい評価を受ける必要があるのだから、筆者は(1)これが間違っていると言いたいわけではない。ただ、プロが当該の問題にどのように取り組み、何に悩み、どんな工夫をし、その上で現状はどこまで来ているのかを知っているのと知らないのとでは、主張の冷静さや現実性が違って来ようと言いたいのだ。

メディアに対しても同様だ。私たちは安易に、「テレビなのに間違いを報道した」「新聞なのに大事な記事がちょっとしか書かれていない」などのように批判してしまう。テレビが結果的に誤った報道をしてしまったのは、少しでも早くニュースを伝えたかったからではないか。不正確な情報を流すことはとがめられるとしても、その背景にある思いや願いを無視することは身勝手すぎないか。新聞に大きく取り上げられないのは、その人にとっては大事な記事でも、読者一般に対してはそうでもないということではないか。あるいは当日の他のビッグニュースとの関係ではないか。このように、メディアの発信側の意図に迫ってみることで、(2)単純な怒りからは解放されていくのだ。

(堀田龍也『メディアとのつきあい方学習』ジャストシステム)

問1 下線部(1)「これ」とは何ですか。

21

1. プロを批判すること
2. プロが必ず正しいこと
3. プロが厳しい評価を受ける必要があること
4. プロが当該の問題に取り組むこと

問2 下線部(2)「単純な怒りからは解放されていく」というのは、どういうことですか。

22

1. メディアの不正確な情報を信用するようになる。
2. メディアの情報を自分の都合に合わせて解釈するようになる。
3. 個人的、表面的な見方でメディアを批判することがなくなる。
4. メディアの情報を無視するようになる。

XVII 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

仕事の上で発生する問題には、大きく分けて3つの種類があります。

1つは発生する問題いわゆるトラブルです。顧客からクレームが発生した、工場のラインが止まった、など突発的に起こる問題です。

これらは放置しておくわけにはいかないから、必ず問題として取り上げられ、対処が進められます。ただし、対処をしてもそれは基本的に「現状復帰」のための対処であり、この手の問題を解決しても現状がよりよくなるわけではありません。つまり「守りの問題」なのです。

これに対して、2つ目に発見する問題があります。「(A)」取引先の債権回収率が悪い」などの慢性化した問題が該当します。こうした問題は、慢性化して慣れが生じると「たいしたことではない」と見過ごされ、日常化し、問題として取り上げられなくなる危険があります。しかし、こうしたところにスポットライトをあてて改善活動に取り組むと、状況をよくすることができます。

3つ目は創る問題です。「新しいビジネスを始めよう」というようなものです。問題というよりは「さらなる成長のために取り組むべき課題」という方がふさわしいでしょう。やらなくても今までどおり仕事は回っていくから、自ら積極的に見つけ出さない限り発生することはありません。しかしこれを発掘して取り組むことで、新しい可能性を生み出すことができます。改革型の問題だといえます。…(略)…

2つ目の「発見する問題」と3つ目の「創る問題」は、取り組むことで現状を変えることができます。つまり攻めの問題といえます。本来、企業が取り組まなければならないのは、この攻めの問題です。守りの問題を解決することに徹していても、そこには成長はありません。攻めの問題にチャレンジしてこそ、組織も人も成長します。

これから求められるのは将来を切り開く力を持った人材です。現状の事業の枠組みを維持するだけでは、市場の動きに対応できずに淘汰とうたされてしまいます。…(略)…現状に漠然と満足するのではなく、「今、何をすべきか」を考え、現状を打破し、常に新しい可能性を生み出す努力を続けることができる人材が必要とされているのです。

(西村克己『問題解決トレーニング』イースト・プレス)

問1 (A)に入るものとして最も鞘なものはどれですか。

23

1. お客様の注文内容を間違えた
2. 工場の不良品の発生率が高い
3. 工場で事故が発生した
4. 急に注文が増えた商品の生産が追いつかない

問2 「発生する問題」「発見する問題」「創る問題」の重要度を適切に示しているのは、どれですか。
($A < B : A$ より B のほうが重要, $A = B : A$ と B の重要度は同じ)

24

1. 発生する問題＝発見する問題＝創る問題
2. 発生する問題<発見する問題＝創る問題
3. 発生する問題>発見する問題＝創る問題
4. 発生する問題>発見する問題>創る問題

問3 筆者は、これからの人材に求められることは何だと述べていますか。

25

1. 攻めの問題に取り組み、現状を改革する力
2. 問題解決のために、人と協力して取り組む力
3. 直面した問題を分析し、解決法を見つける力
4. 小さい問題も見過ごさずに対応し、現状を維持する力

読解解答

問	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
欄	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
答	4	1	3	1	3	4	2	4	1	2

問	XI		XII		XIII		XIV		XV		XVI		XVII		
	問 1	問 2	問 1	問 2	問 1	問 2	問 1	問 2	問 1	問 2	問 1	問 2	問 1	問 2	問 3
欄	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
答	2	3	4	1	4	1	2	4	1	4	1	4	2	2	1

2010.11.06 初版

okd

小春論壇 <http://www.xiaochuncnjp.com/>

mone!工作組 <http://monemone.co.de/>